

■平成 22 年度 第一期 (7/26~8/6) インターンシップ技術講習生の受入れ

技術講習生のプロフィール	技術講習で体験したこと、感じたこと	今後の抱負など
<p>①上野由樹 日本大学 生物資源科学部 生物環境工学科 3年</p> 	<p>プログラミング作成、野外調査、室内実験など、複数の研究室で様々な作業に関わった。 大学では教員に指示されたとおりに作業に当たれば良いが、結果が分からず、方法も決まっていな作業を体験し、自分で学び考えることの意味に気づいた。</p>	<p>実習の期間中に、大勢の研究者と会話する機会に恵まれ、また、第一線の研究に触れることができ、とても有意義だった。今後の自分の進路を考えるに当たり、研究という職業を選択肢の一つに加えたいと思う。</p>
<p>②小山 航 日本大学 生物資源科学部 生物環境工学科 3年</p> 	<p>同上。 大学では手段や答えが用意されているが、研究活動は、答えを見つけるため、手順を追って地道に行動するというものだった。また、その活動には、研究者の個性が反映されていた。</p>	<p>農業工学分野には、様々な立場の視点で考えること、目標を達成するには多様なアプローチが必要であることを知った。この体験を、今後の自分の糧として、しっかりと学んでいきたい。</p>
<p>③鈴木祐喜 筑波大学 生命環境学群 生物資源学類 3年</p> 	<p>地下水解析に必要な新しい前処理法を確立するための実験補助を行った。途中で分析装置が故障するハプニングがあり、不測の事態やうまくいかない時に、どこに原因があるかを見極める能力が大事と感じた。お膳立てができた大学では味わえない貴重な経験だった。</p>	<p>技術講習を受け、自分が将来やりたいことのイメージが、前より具体的になったことが一番の収穫です。これからは、そのイメージを現実のものにできるよう、一層がんばります。</p>
<p>④関根寿子 日本大学 生物資源科学部 生物環境工学科 3年</p> 	<p>農村環境に配慮した整備を進めるため、絶滅危惧雑草を指標とする調査研究を補助した。調査結果から生息環境を分析し、人為的な整備と生息分布等の関連を推定し、次の調査地点等を決めていく等の科学的な調査方法を学んだ。</p>	<p>研究成果をまとめるためには、何度も繰り返し調査し、解析を重ねていくという地道な作業が必要なことを知った。与えられた作業をこなすのは大変だったが、学ぶことの楽しさを実感した。自分自身が成長できたと感じており、この経験を今後活かしていきたい。</p>
<p>⑤中山智喜 新潟大学 農学部 生産環境科学科 3年</p> 	<p>同上。 私と関根さんとで調査結果を自分たちなりに分析し、生息域の条件を推測して、研究者に指導を仰ぎ、実践的なものの見方を学んだ。</p>	<p>個人的に関心の高かった植物調査に関わり、その研究補助から派生して様々な事柄に興味広がっていく自分に気がついた。この体験を、今後の大学生活や社会人になっても活かしていきたい。</p>
<p>⑥小西麻友 日本大学 生物資源科学部 生物環境工学科 3年</p> 	<p>融雪パラメーターの推定を行う研究を補助した。自分の行った作業結果が、今後の研究データとなることにプレッシャーを感じる毎日だった。また、2種類の推定法に取り組み、パソコン操作能力が随分と向上した。</p>	<p>責任を与えられ、常に緊張感を持って作業に取り組んだ。この経験は、今後の進路を考える上で、自分にとってかけがいのない財産となった。また、研究職には、ものの見方を変えてみる柔軟な発想力が大事であることをひしひし感じた。</p>